

審査結果の要旨

論文題目「Culturally Responsive Solution for Sustainable Urban Development in Post-Conflict Context: The Case of Kabul City」

(紛争後の持続可能な都市開発における文化的対応による
解決策の検討;カブール市を事例として)

学位申請者 Hidayat Osama

本論文は、発展途上国の紛争後の都市における持続可能な都市開発のための文化的対応（民族の習慣、文化を考慮し、安価な住宅供給）の重要性に関するものである。本論文で報告されている主な学術的成果は、紛争を経験した他都市との比較により都市開発における共通の課題と相違を明らかにし、他都市への適応を検討したこと、また、あまり実施できない紛争後の都市での住民に対する居住環境に関する貴重なアンケート調査結果を用いて意識構造分析が可能なAHP手法などにより居住に関する意識構造を分析し、文化的な対応の要因が重要視されていることを解明したことである。

本論文の背景には、発展途上国では紛争後に復興のための都市開発計画が先進国の技術的支援により策定され、都市開発プロジェクトが実施されているが、難民などが大量に都市に戻ってくる状況に対応しきれていないことやその都市の文化や習慣などを考慮した開発となっていないという現状がある。これに対して、本論文の目的は、発展途上国の紛争後の都市開発はどのように行われているかを類似の他都市との比較より類似点と相違点を明らかにし、今後の発展途上国の紛争後の都市開発のより効果的な計画策定への示唆を与えること、また、住民や専門家に対する居住環境に関するアンケート意識調査を実施し、居住に必要な要因やどのような住宅供給による都市開発が住民に求められているのかを定量的に分析しながら検討した。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、本論文の対象とする研究の背景、本論文でとりあげる用語の説明、発展途上国の紛争後の都市開発や持続可能な都市に関する既存研究、文献の紹介をしている。また、本研究の新規性、仮説、目的、方法論、内容を紹介している。序論としての的確であり、本研究の目的を明確に示している。

第2章では、本論文の対象であるカブール市での紛争後の都市開発プロセスや計画・マネジメントの状況についてGISなどを用いて分析した。また、同じ紛争を経験したルワンダのキガリ市の紛争後の都市開発を分析した。類似点として、難民の経済的不平等があり、これらに対応した都市開発が必要であること、都市開発のための規制が不十分などであることを明らかにした。また、カブール市は新都市の開発計画を策定したが、実施には至っていないことを明らかにした。発展途上国における紛争後の都市開発状況について詳細かつ的確に述べられており、学術的に有用であると判断される。

第3章では、カブール市の5つの地区の住民に対するアンケート調査による居住環境の分析について述べられている。紛争後の住宅開発や難民帰還状況、文化的で持続可能な開発に必要な施設などの項目の整理、その項目に基づく満足度アンケート調査結果の分析を行った。社会インフラは交通渋滞、環境は、ごみ収集、公共施設ではレクリエーション施設の整備がより不十分であることが明らかとなった。これは大量の難民帰還により、多くの住民がインフラ未整備で環境が悪い場所に住まざるをえないことを定量的に見出した。

第4章では、公的や民間の住宅供給の現状と住宅環境による住民及び専門家の評価を分析したものである。人の意識構造分析が可能なAHP手法を用いて、住宅に必要な6つの要因（住宅設

備、部屋のサイズ、インフラ、場所、アクセス性、安価性（収入に対する住宅価格）の重要度を分析した。結果として、住民及び専門家とも安価性が最も重要視されており、また、安価性を重視している住宅を住民が求めていることが明らかとなった。

第5章では、結論として、各章での研究成果を総括し、今後の課題を述べている。アフガニスタンの住民は、新都市の開発ではなく、現状の居住地で、安価な住宅供給に加え、インフラの整備と環境を改善し、その住民たちのコミュニティーの形成により、文化的で伝統的な居住環境を継続することを望んでおり、そのような文化的な対応をした都市開発による計画の立案と事業が求められると本論文をまとめている。これらの結論は、今後の発展途上国での紛争後の都市をどのように開発しながら都市整備をしていくのかを示唆したものであり、同じような環境の都市への適用が十分に期待できることを示している。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。

したがって、学位申請者 Hidayat Osama 氏は東海大学博士（工学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論文審査委員

主査	博士（工学）	高橋 達	工学部教授	(総合理工学研究科総合理工学専攻)
委員	博士（工学）	山本 吉道	工学部特任教授	(総合理工学研究科総合理工学専攻)
委員	博士（工学）	三神 厚	工学部教授	(総合理工学研究科総合理工学専攻)
委員	博士（工学）	鈴木 美緒	工学部准教授	(総合理工学研究科総合理工学専攻)
委員	博士（工学）	梶田 佳孝	工学部教授	(総合理工学研究科総合理工学専攻)